

土蔵

フィールドワーク レポート

フィールドワーク調査実施背景

2026年3月7日、下諏訪町及び諏訪湖博物館・赤彦記念館では信州大学工学部建築学科梅干野研究室のご協力の元、2区を対象とする「土蔵」の調査を実施させていただきました。当該調査は、町の景観的・建築的な特徴を把握し、下諏訪らしい地域づくりのあり方を検討するべく行なっている調査の一環となります。

こちらのレポートでは、信州大学さんからご説明いただいた土蔵に関する基本情報や、今回の調査から見てきた地域の土蔵の特徴などを簡単にまとめております。是非ご覧いただければと思います。

01. 土蔵の基本情報

土蔵とは？

木骨土壁を持つ構造の建物を指します。防火・防犯のために工夫された建物の形態で、当初は貴重品や貨物を保管する蔵等として建てられましたが、次第に座敷、店舗、住居、酒造、藍玉造り等へも広がっていったとされています。（建築大辞典第2版より）

土蔵の建築的な特徴としては、以下のような点が挙げられます。

- ・ 外側は柱の見えない「大壁造り」、内側は柱が見える「真壁造り」となっており、壁の厚さが厚い。
- ・ 柱の間隔が狭い
- ・ 白漆喰塗仕上げや、中塗り（下地と仕上げの間に塗る中間工程）の状態を仕上げとするものが多い。

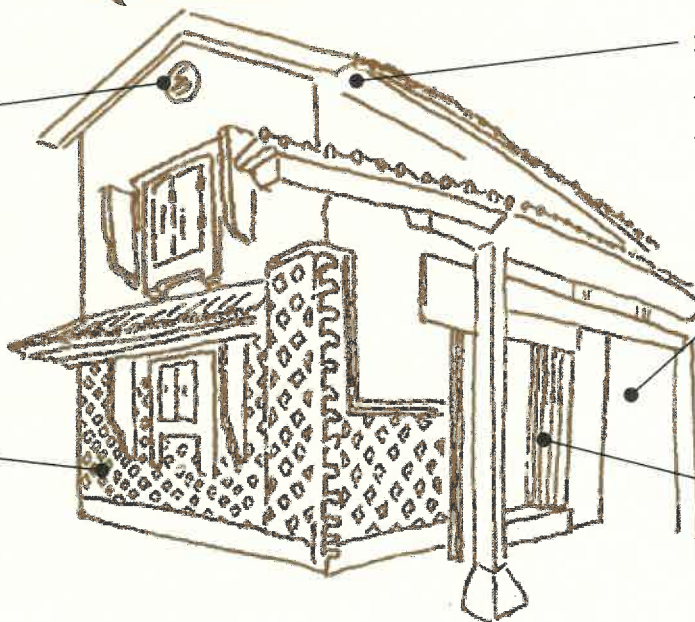
土蔵外壁名称

丑鼻

建物の切妻屋根の三角形の部分に配置される、漆喰等を用いて装飾された文様のこと

海鼠壁

壁面に平瓦を並べて貼り、瓦の目地（継ぎ目）に漆喰を蒲鉾形に盛り付けて塗る壁の様式。



鉢巻

屋根の下、壁の上部に設けられた、斜めの部分

戸前

蔵の入口の戸の前の部分

掛け子塗り

防火性を高めるために観音開きの扉や窓の合わせ目部分に用いられる、階段状のつくり。

02. 諏訪の土蔵の特徴

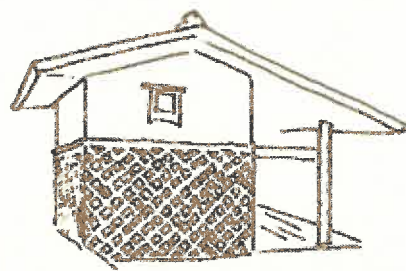
土蔵の中でも諏訪エリアの土蔵の特徴として、「建てぐるみ」と「だし付き」が挙げられます。



建てぐるみ

土蔵を主屋内部に取り込み、一つの屋根で一体的に覆った建築様式。

動線的な利便性を高めたり、冬の厳しい寒さの中で蔵の保温性を高めることを目的にしたものと考えられています。



だし

前方に伸ばした屋根庇の下に床を張ってつくられた収納空間

03. 今回の調査結果レポート

[調査範囲]

2区のうち三角八丁エリアに該当する範囲を対象に調査を行いました。

[土蔵軒数]

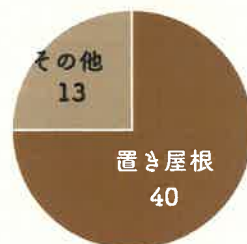
上記範囲内で確認できた土蔵の総数は **53** 軒

[2区の土蔵の特徴]

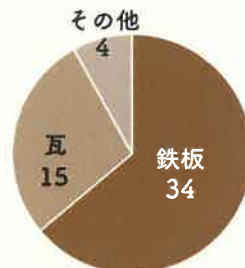
- ・置き屋根の土蔵が多く、全体の7割を超えました。
- ・平入りの土蔵が多く、全体の約9割の土蔵が平入りの土蔵となりました。
- ・屋根については改修が進んでいるものが多く、鉄板葺きのものが多い結果となりました。
- ・だし付きの土蔵も15軒（屋根庇が伸びるが、床の有無の判別が困難なものを含む）ほど残っており、諏訪の特徴を反映していました。また、だし部分にも壁を設け、壁面を大きくとる土蔵も散見されました。
- ・建てぐるみの土蔵は3軒で、今回の調査エリアでは少ない結果となりました。

当該エリアにおいては自由な改変が加えられた土蔵が多く見られ、個性が高いように感じられました。この点には、町の産業構造の時代の中での変化、それに伴う生活様式の変化が反映されているように思われ、土蔵の作りからも下諏訪町の歴史背景を感じ取ることができました。

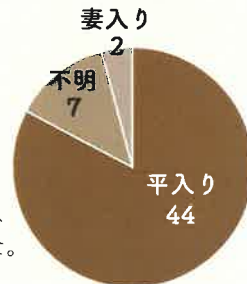
[屋根の種類]



[屋根の葺き材]

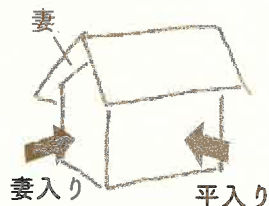


[入り口位置]



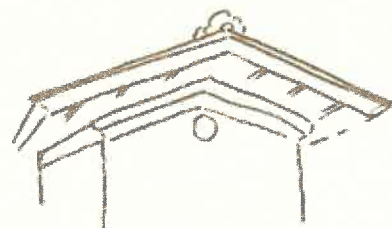
妻入り／平入りとは？

屋根に対しての入り口の位置を指す言葉で入り口が三角形側にあるものを「妻入り」直線側にあるものを「平入り」という。



置き屋根とは？

2重構造の屋根。建物自体の1層目の屋根は土で仕上げられ、その上に2層目の屋根が骨組みごと乗っている構造の屋根。



蔵の解体を検討されている方は、解体前に是非ご一報ください。

建物の記録や収蔵品の調査などを博物館にて実施させていただきます。

問い合わせ先：下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館 ☎0266-27-1627